

## 「第4章」シュークリームをシュレッターにかけるの巻

×月×日

三日間の出張から仕事部屋のあるマンションに戻ると、郵便受けが大変なことになっていた。

中に入りきらなかった郵便物が、リーゼントヘアみたいに芸術的な飛び出し方をしている。近所迷惑というものだ。郵便配達の人々よ。突っ込めばいいというものではない。

と思いつつ、飛び出し方の奇跡的なバランスに感銘を受け、ケータイで写真を撮る。私のマンションでは、郵便受けに入りきらなかった場合には別の箱型ボックスに入れてもらうようになっていたのだが、そこも満杯だった。

たった三日間の留守なのに、冗談抜きで一メートル近い郵便物。このデジタル時代に、なんとアナログなことかと呆れる。

クロネコヤマトや佐川急便は、おおむね配達先の癖(いつごろ在宅しているか)を踏まえる努力をしているので、たとえ受け取る側が不在票に反応しなくても、効率的な再配達を心がけている。対照的に我らが郵便局員は、未だ自分たちの都合のみによってたつマニュアルに忠実なので、一度だけ(最大で二度)「郵便物お預かりのお知らせ」で一週間の猶予を通知するだけで、あとはまったくなんの努力も工夫もせず機械的に差出人に戻してしまう。さすがだ。

×月×日

なぜ、人は恋に落ちてしまうのだろうか。

理由なんかない。

むしろ問題は、終わり方にあるのではないか。

\*

しばらく前に、こんなことがあった。若い友人が結婚することになり、私のところにも招待状が届いていた。式の直前ゆえ忙しいはずの彼が訪ねてきて、こう言った。

「彼女にドタキャンされてしまいました」

若い友人の手は、大きく震えている。彼女にそう宣告されてから、精神が不安定になり、利き腕の震えが止まらないのだと言う。彼は記者である。これでは仕事にならないだろう。しかし、仕事どころではない。

「あなたが最高の人という確信がもてないの」

それが、式直前のフィアンセの宣言だったそうだ。

私も一瞬「なにを！」と思った。そんなことを言い出したなら、結婚なんてありえなくなる。最初から結婚しない、という道はもちろんありえるだろう。恋愛をスタートさせ、一緒に暮らしてゆく道を選び、それを周囲や世間に認知してもらうことで結婚という制度が機能する。

かつて、結婚式場関係者からこう聞いたことがあった。

「親御さんと一緒にお申し込みに来られるカップルで直前にドタキャンになるケースはまずありません。けれども、熱々のカップルは、必ず一定の割合で破綻します」と。

結婚とは、単純に言ってしまうと、「二人を「別れにくくする」システムであるように思う。離婚には、話し合いによる合意または調停または審判または判決が必要だ。そこが、友人や恋人と違う。

簡単には別れることはできない、という仕組みが様々な問題を解決しやすくしている、とも言える。耐えがたい事態が重なっても、「別れる」というオプションを安易に想定しなければ、その枠内で対処することもできる。が、そのような枠組みに入ってもこの人となら本望だ、とは言えないと思いはじめたら、瓦解は目に見えている。

若い友人のフィアンセが、そのことに思い至ったのかどうかは、私にはわからない。「あなたが最高の人という確信がもてないの」

残酷な言葉である。そう宣告された彼は、「別の人がいる」と言われたほうがどんなにかラクか知れない」と嗚咽した。

しかし、本当にそうだったら、ラクであるわけがない。今とは違う状況のほうがラクかもしれない、と思えているだけだ。

彼のフィアンセは身勝手な女性なのだろうとは思う。強い女性ではあるのだろうし、出会いに対する自信もあるのだろう。彼の痛みを本当には理解せず、ここに至るまで

自分の気持ちを押し量ってくれなかった彼を恨んでいる気配さえある。切られる痛みは、切った側には永遠にわからない。

彼が突然の別れと直面したとき、すでに彼女は結論を出していた。けれども、彼にとっては青天の霹靂だから、「なぜ」「どこかいけなかったのか」という問いが何度も何度も反芻され、「どうしてもっと前に言ってくれなかったのか」と悶々とせざるをえなかったのだろう。

だが、正確に答えてくれる人は誰もいない。

おそらくその女性は、結婚しようとして二人で決めてから結婚式に至るその道程で「これは違う」と感じ始めてしまったのだろう。

結局のところ結婚は、主観的には「一番と思える人と一緒にいる」と信じていることだが、客観的には「妥協することであり、」とにもかくにも一緒に決断することである。幸せな人生とは、その妥協を運命と受け止められる潔さであるように思える。

\*

夜九時半ころ、JRのとある駅に近い公道で親子三人連れとすれ違う。

三九歳くらいの妻が大声で「電話したの？　なんでしないの？」と、推定四三歳の夫

を怒鳴りつけていた。夫は、酔っていて足取りがおぼつかない。

酒でも飲まない和小うるさい妻とやっていけないのか、夫の優柔不断さが妻には耐えられないのか。ごく普通に、こういう言い合いを外でするのは、きつと慣れているのだろう。

私が愕然としたのは、小学四年生とおぼしき男の子が、母親の罵倒に続けて、父親にこう言い放ったときだ。

「なんで電話をかけないんだよ、このバカ野郎」

このような状態を放置してきた父親にも責任はあるのだろう。妻と息子から軽蔑される父親。この息子が高校生にでもなったとき、穏やかな家庭がそこにあるとは、とうてい思えない。

それからしばらくして住宅街を抜けて行くと、一戸建ての駐車スペースに停まる車の室内灯がついており、運転席でビールをおおる五五歳くらいの男性を間近に見てしまった。

すごい形相だった。

おそらく、この家の主だ。缶ビールをおおった直後に決然と車から降り、自宅のド

アの鍵をあけた。

家の中に入るまでビールが我慢できなかった、というのではないだろう。その後には何が起るのか。これもこの家族には「日常」なのかもしれない。夫は何かを起こそうとしているのか、隠そうとしているのか、それとも何かに耐えているのか。

### X月X日

日本独自と言われる「私小説の系譜」に、私はこれまで否定的だった。しかし要するに小説は、読む人を感動させるかどうかにかかっている。

田山花袋の『蒲団』(新潮文庫)を久しぶりに読む。

等身大の花袋(作中では作家の竹中時雄)が若い女弟子(作中では芳子)に恋をする。

そのうち芳子に同世代の恋人ができるが、結局のところ実らない。時雄は思慕を断ち切れぬまま芳子を郷里に帰す。恋しい人は、もう同じ家にはいない。彼女が部屋で使っていた蒲団に、顔をうずめて彼は泣く――。

めめしい、としか思えなかった明治四〇年に発表されたこの私小説も、今ならわかる。

誤解してもらっては困る。花袋の気持ちが変わる年齢になったとか、そのような体験をしているとか、そういうことではない。

書くことで初めて自分を整理できる——書かないと生きていけない——という私小説の在り方が、少しずつわかりかけてきた、という意味にとっただけだと幸いである。

物語や結構(組み立て)は、創意に頼るしかないとしても、心境描写は、想像力だけでなく体験に根ざす部分が多い。敢えて露悪的に描かれたものが、私小説と呼ばれてきたのだろう。

### X月X日

散歩がてら、お米を買いに行く。腕力を衰えさせないという涙ぐましい努力の一貫として、けっこう長い道のりを運んでくる。

いつもの店が閉まっていたので、初めての米穀店に立ち寄る。

「低農薬のコシヒカリをください」と私が言うと、店主が答えた。

「低農薬って言ってもねえ、同じだよ、みんな」

私は一瞬ギョツとした。しかし、よく考えてみると、それはそうかもしれない。うすうす感じてきたことではある。

低農薬米は、同じ品種や同じ産地でも値段が高い。けれども、発芽までたっぷり農薬に浸しておいて、その後を少しだけ低農薬にするのと、発芽までを低農薬にして、その後は普通に育てた米の区別など、ベテラン米穀店主にもつかない。袋にラベルがなければ――。

我々は「信じるしかない」ということになる。

水道水よりもペットボトルの水のほうが高価であることは確かだが、後者のほうがずっと安全だという保証は何もない。

もっと勉強したいと思う。

自分で米を作っていた時期もあるのだが、まだよくわからない。

## X月X日

日中しばらく時間をつくれず、仕事部屋用に食料を買い出しに行けなかった。

冷蔵庫をあけると、シュークリームが入っている。四日ほど前に買ったものだ。賞

味期限は三日前に切れている。

かまうものか。

私は鼻がかなり利くほうなので、食べる瞬間「あつ」と思った。平均的な嗅覚の人なら気づかないはずだ。

味は、まだ落ちていない。およそ人が口にするものは、「腐り始めている」という必然的な流れから自由になれない。加工食品は「完成した」瞬間から、果実や野菜は「られた」瞬間、あるいはそれ以前から劣化が始まっている。

そんな哲学的なことを考えながら安物のシュークリームを食べることもないかもしれないが、そういうことを常に考えてしまう性質たちなのだから我慢していただきたい。いくら「新鮮なサンマだよ」と魚屋が言っても、所詮あれも死体だろう。

さてシュークリームは、たった一〇五円であった。値段のシールがついている。こんな安物のシュークリームを、若干のリスクを背負って食べていいのか。

いいのだ。

私は結論を出した。

お茶を入れて、食ってしまった。

その直後、やはり失敗したかと微かな反省が胸中<sup>しゅちゅう</sup>出来る。

一〇五円なのに、意外にうまいではないか、と思ってしまうたのは不徳のいたすところだが、問題はそんなところはない。喉元<sup>のどもと</sup>を過ぎたあとで、私の嗅覚は失敗を訴えている。

腹をこわすかもしれない。

だが、もうどうすることもできない。三年半前に九人で荒れ果てた猛暑のイラクを旅したとき、腹をこわさなかったのは私ともう一人だけだった。それなりの用心深さと、そこそこに強い胃をもっている。が、ついに一〇五円のシュークリームには負けたくもれない。

昼間にもかかわらず、私は寝ることにした。この不快感は、私の胃を直撃するに違いない。闘いは、胃に任せるしかない。苦しむのは嫌だから、寝てしまうことにしたのである。

男としてその前に為すべきことがあるように思え、一〇五円の表示がついたシュークリームの透明な袋を、私は仕事部屋の片隅にあるシュレッダーにかけた。

万々が一にも、寝たまま生き返らないかもしれない。

検死が行なわれたとき、一〇五円のせいで俺が死んだというふうに理解されるのは耐えがたい、と思ったのである。

目覚めは、実に爽快だった。

## ×月×日

植草教授が今度は痴漢で逮捕され、テレビでは、吐き捨てるようなコメントや解説が大量に流された。

《植草容疑者は二〇〇四年四月、J R品川駅のエスカレーターで女子高生のスカートの下に手鏡をかざして覗き見した容疑で逮捕された。昨年三月、東京都迷惑防止条例違反罪で罰金五〇万円と手鏡没収の判決が確定したが「冤罪だ」と訴え続けていた》というニュースが全国を何度も何度もかけめぐる。

本当は、「罰金五〇万円」だけで記事としては充分なのである。「手鏡没収」を、笑うためにわざと付け加えたなら話は別だが、例えば果物ナイフを使った傷害事件に対する「懲役二年」という判決には、当然のごとく「果物ナイフ没収」が付加されていて、報道時には省略される。

今回の痴漢騒ぎで、九九%のニュース報道に「罰金五〇万円と手鏡没収の判決」と表現されていたのは、聞き手や読み手の笑いを誘ったわけではなく、報じる側が「カット&ペースト」し続けている証拠だろう。

別に、そんなことはどうでもいい。

考えたいのは、次のようなことだ。週刊「エコノミスト」(一〇月三日号)の巻頭コラムに、私は敢えてこう書いた。

——19歳による山口高専殺人事件では、被害者の顔と実名をバンバン報道し、加害者を匿名扱いにし続けることで、またマスコミは信頼を失った。同業他社の出方だけを気にする能力にかけては、実に見上げたものである。

人が殺されたのだ。少年法61条は逃走中の少年容疑者の匿名など求めておらず、顔写真も掲載不可とは宣言していない。せいぜい同条は家裁審判開始後または起訴後の《氏名、年齢、職業、住居、容ぼう等》の掲載を禁じているだけであり、もし仮に容疑段階からこの条文が生きているとマスコミ各社が本気で信じているなら、**19歳であることや所属学校名も**言い立ててはいけないことになる。

他方、「中略」著名教授が、今度は痴漢容疑で逮捕された。すべてを失うだろう。誰もが「信じられない」と言う。「バカか」と罵る。

彼をめぐるこの世論の流れのなかで、酔って自宅と反対方向の電車に品川駅から乗ること自体も私には理解しがたいが、人殺しレベルで19歳の名前や写真を隠してやりながら、スカート・レベルで実名・顔晒しをする各社の基準はもつと理解しがたい。「中略」この流れでありえない」著名教授の行為は、**どう考えても病気**なのだから、むしろ刑法39条を適用すべきではないのか？

私は、彼の家族に深く同情する——

家族とは何か、と私は今もずっと問い続けている。

家族が許すにも、おそらく限度というものがある。妻はもう許せないだろう。子も許さないかもしれない。しかし、親は包み込むだろう。

誰にとっても「**与えられた家族**」は、不幸だったかどうかとは無関係に、かけがえない存在だ。そして、「**与えられた家族**」と同様に「**創る家族**」も、かけがえがない。

今回は、ちよつと神妙に書いてみた。

〔W i l l 二〇〇六年十一月号〕